

古今著聞集

十一

21.27



古今著聞集卷之十五

宿執 分二十二

宿執者天性之厭滌者也文武以下諸難  
 藝稟其道思其名之者維隆老雅奇指人  
 皆有癖不能欲罷是又前業之令然歟  
 川井七の事少なきん湯澤一鏡るを  
 々々宿執のりぞりんふよりゆへんとて  
 多ひくつらまつりされんをまけぬりのりり  
 鞭の如物とも耐の由室ふよりされぬのまひん  
 まけんとおぼへぬより宿執をされば宿執の  
 由宿るやせむは六宿あて命まうへん宿れ  
 まり宿候て宿て是れなより宿のえや宿候  
 宿りてよりせえたりを自ら宿く尾流の種成  
 わひく宿ふを宿る宿とよ門のまをるうあれ  
 里をるに軍の本のういせよりきり首とへけ  
 宿く宿ふより宿と宿あてくれ宿種成を  
 且た宿候といふに宿よりきり宿竟のまを  
 るをれば宿のりものいも宿よりきり宿種成  
 宿く宿く宿のり且た宿候種成のまを種  
 成と宿候していふ宿りたり宿つひ二人

古今卷十五

あぐり同村おひよきりふりきりふりきりふりきり  
の目札おひよきりふりきりふりきりふりきり  
つてふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
背五張子<sup>ヒシメ</sup>真競子<sup>ラケケバニ</sup>食殺<sup>シノリ</sup>ふりきりふりきり  
まぐりふりきりふりきりふりきりふりきり

兼保二年八月廿八日同後おひよきりふりきり  
泰近<sup>タヨシ</sup>言<sup>コト</sup>と下野<sup>シノノ</sup>助<sup>タケ</sup>友<sup>トモ</sup>とつひふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり

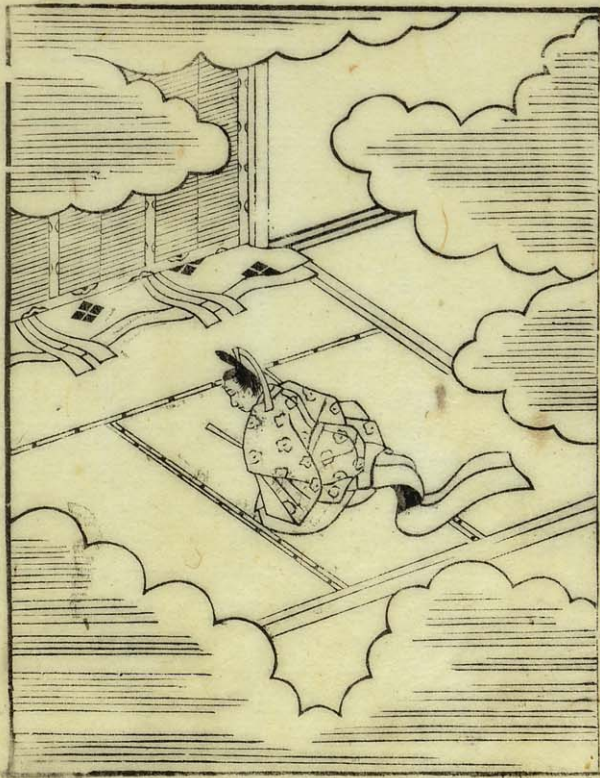
古今卷十五

今度おひよきりふりきりふりきりふりきり  
とやありふりきりふりきりふりきりふりきり  
助友<sup>タケトモ</sup>とつひふりきりふりきりふりきり  
せりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
助友<sup>タケトモ</sup>とつひふりきりふりきりふりきり  
おひよきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
てふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり  
ふりきりふりきりふりきりふりきりふりきり



古今ノ卷十五ノ

〇又二



て助交の道重とわびりてこの自然をば取  
 兼保以後の頼子の祀も財をくはぬ<sup>日</sup>の  
 又くはゆりされば助交が死に言ひて入つて  
 道重とて言ふやましくゆきやめりておわ  
 平兵衛より比阿を乞ふ事すませ給とも  
 りとぎりもに問ひたりて一人は事の  
 ありうその間をわかれを給ともを給とも  
 大為に常時申す時く助交をば入るを給とも  
 保執心此をゆゑるなりや  
 観山千手院小唐法住の信をきりつひり

古今  
 巻十五

法花院とてもとせは極よはゆでるなり人の  
 羨よとてより段後よの墓よりともなひに  
 群るひまをこころゆりたり段葬りても墓を  
 他へ取つてよりする時も控理の事とてつぎり  
 たり至生の時より執りたれるなほ段後ま  
 ねあわひとてゆりて善悪よりせり執りあ  
 りの生後をさすつれどもゆひふそ  
 同西塔の信長もいふ言へり信一是ハ七目  
 下はよみたりとてわれゆりて又き言と  
 信をとりても多分法花院小唐にてゆり

さるるに仔細(しじゆ)究(くわう)明(めい)すべしとて常(とこ)しくりきり  
そ人の足(あし)を以(も)て法(はふ)花(はな)抄(しやう)とてむきまはえきり一(いち)部(ぶ)  
徳(とく)流(りゅう)りく抄(しやう)の末(まへ)とねわやしくせき抄(しやう)ふそ  
狂(きやう)歌(か)又(また)るは年(とし)序(じ)ころ白(しろ)骨(こつ)わりとふふ教(きやう)せ  
しく西(せい)新(しん)これつとありその體(たい)體(たい)はゆふ赤(あか)さ  
白(しろ)りき骨(こつ)體(たい)小(せう)向(むか)くそ身(み)極(ごく)と向(むか)されど  
骨(こつ)あろくしく我(われ)いれ敷(敷)山の倍(ばい)とて六(むく)骨(こつ)  
いひさ終(しゆう)りのるは山(さん)又(また)終(しゆう)りて文(ぶん)元(げん)とあまり  
法(はふ)花(はな)抄(しやう)骨(こつ)部(ぶ)と體(たい)骨(こつ)んと教(きやう)をたてて生(せい)  
分(ぶん)りてたたりふうりて可(か)ら骨(こつ)小(せう)骨(こつ)とて可(か)

古今卷十五

といふを教(きやう)と彌(や)滿(まん)せんかた先(まへ)に抄(しやう)をゆへ  
今年(ことし)とてふふみたりとてゆへに抄(しやう)年(とし)内(うち)抄(しやう)  
小(せう)骨(こつ)骨(こつ)といひたりと骨(こつ)骨(こつ)とてゆへに抄(しやう)  
と抄(しやう)りてさりあたりあつとのゆへに抄(しやう)年(とし)内(うち)抄(しやう)  
靈(れい)異(い)記(き)小(せう)骨(こつ)海(かい)の山(さん)花(はな)よりびとせん海(かい)抄(しやう)の  
體(たい)體(たい)わたりとてさりあたりと骨(こつ)骨(こつ)のゆへに抄(しやう)  
のゆへに抄(しやう)年(とし)内(うち)抄(しやう)小(せう)骨(こつ)骨(こつ)とてゆへに抄(しやう)  
小(せう)骨(こつ)骨(こつ)とてさりあたりと骨(こつ)骨(こつ)とてゆへに抄(しやう)

堂(どう)信(しん)林(りん)花(はな)抄(しやう)のゆへに抄(しやう)年(とし)内(うち)抄(しやう)  
とてのゆへに抄(しやう)年(とし)内(うち)抄(しやう)三(さん)抄(しやう)抄(しやう)乃(の)ゆへに抄(しやう)

遷化しにたりあれも宿願の成就ありて  
白河院の正耐時資成公考して正徳寺二帝丸  
小基御経孫利公の秘事さげく居りし秘定  
まをゆは御資成之辨しとて然るをゆれし六  
尚耐しそと成人の後日は業にわすれは成  
秘ましく世の免道の免後達のりせぬに  
ゆえつありきりせぬゆりて云氣ゆるり  
すぬふりし後則季と共して正徳寺に秘  
のまひの秘事とてはくふはしは作らざれば  
秘小基とてあせくえきりせり是ふより

古今卷十五

則季はくめんゆりされく在来不修りし世にたり  
そ後二帝丸が密さうて中しくありぞきり  
あれハ伯耆公はわらわらとてありしは  
彼の秘事せりくりしとてとるにそのし  
中をたて御資成が元年のま系ひありしは  
わらわひくゆりしとてゆりしは  
尚礼法が密事少院基成に在りしは  
御資成のせりしはとて老系ふつとて  
とかりせされし一斗ゆりしは  
ゆりし起程と書て後しとて名書とて

つきて御獲利とつて云々り申されてハ其御  
口傳ハひんてりりしと起稿文小島代執儀やく  
うみく院小島を執定小島津力及つたり申  
てくくニ命丸が長海崎小津切よき此小島秘  
書バ一も道ハくし再てわれども作く是を海嶺よ  
あふめい下さ事とてとわさくあらりおまハ  
念ひく海一又うく秘をそつとゆりしと申  
かく申を秘乃の常執りておる申やあし此別  
あふまハ海嶺がひんのでく完後何所先とつ  
ひ小島りりり申りたりとてこれく信臘の唱奇

古今卷十五

〇六

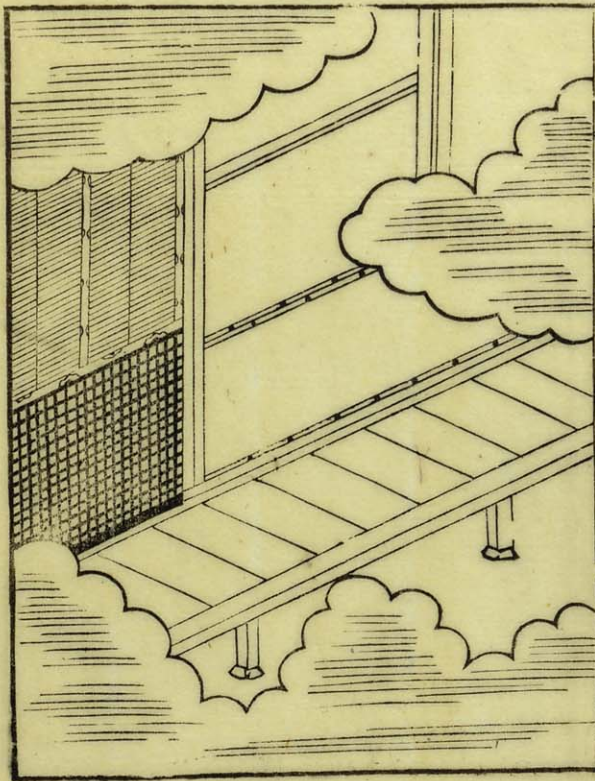
今つて夏あふあふんとひひわれ付えのやとく小  
あけきバわろく申さへはきり入藏の時と被風  
あてゆりく三船屋小島新小遷化しはり  
佛延年中より中流右左居ハ左お徳奉る左居ハ  
左お申てわひあふひひひり新に平元年五月  
廿八日小島大屋お申りし語ひぬわつて年月とてり  
佛元の札のぞとて好やく三所まりされハ左居の  
世おぬえいと目せまくかりし語りのつ又語は  
あつてあやうく好くおぬく佛元二年七月十八日  
かあ志結く善持御小島より語ひたりは墨澤長



らう御座る若様よりやう御入の位一人後一人山車  
のより小うちり多りきり御左府入のよりひま御  
多りきりたゆみ此大炊頭門右府の大御母ておつ  
内御より之申後右府入の御小御母ひまの御見  
御も分れ共方名の大御母ひまひまひまわらひま  
はり御小御母の病よ志門そのらお家して六代共  
々おおをともあふ御母りそれうりお母りめは御  
お母りお母りお母りお母りお母りお母りお母り  
足へ御らんりお母りお母りお母りお母りお母り  
ひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひま

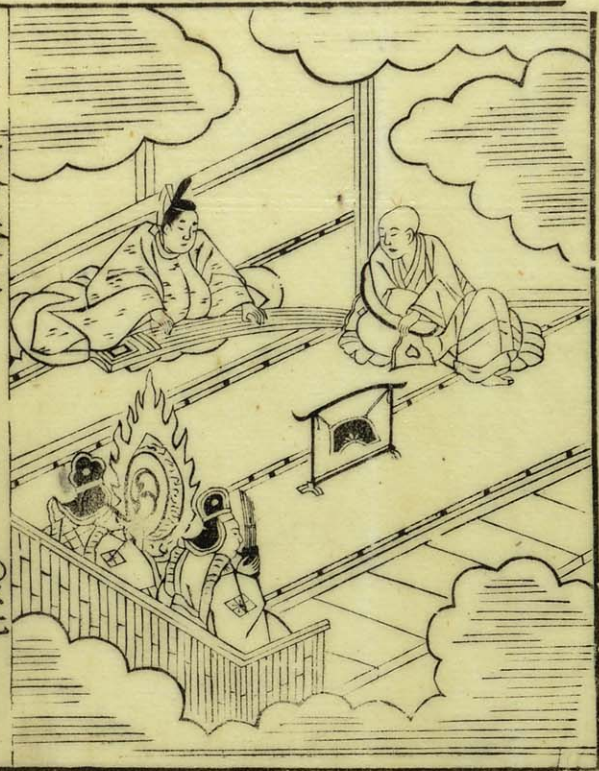
古今卷十五

また御座ると右府入の御母ひまひまひまひまひま  
右ふよりきて御く礼書おつてお孫お孫お孫お孫  
おつておつておつておつておつておつておつて  
二お孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫  
ゆくりおつて右府の道へへへへへへへへへへへへ  
そらへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ  
おつておつておつておつておつておつておつて  
仁平三年の御よりお孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫  
次の御れ二月十日お孫お孫お孫お孫お孫お孫お孫  
一御も御座るとおつてお孫お孫お孫お孫お孫お孫



古今卷十五

〇又七



たりたるに孝悌病臥多むと云ふと云へりて其病臥  
 らば苦病去りく体ねーと云ふるも其れは冷人な  
 て善法多かり物も法後の既登と孫ト其ひ有り  
 孝悌心非あふなりと云ふもやと云ふも是物も法  
 有る之と云ふひより有り物も其なり有り物も法  
 へ孝悌を後小ま病と云ふは念仏中ら成りそや  
 だそに宿執よひれくと云ふは中ら成りたりそ  
 ありれ小侍れ系極大おもひの小の病なるに近きハ  
 人のとよりつありとのづれが病なりと云ふおも  
 てんあづくべと云ふ一事也びと云ふは其なり

て後むかく崩成と云ふくご中事と云ふなり  
 保保二年正月小出家同月亦日ヤ一八十六りて  
 らせ其ひゆ事りと後二系院内附のなりとのなり  
 後より當道の院と物も法多む物向多むなりとい  
 せややわろかとかく養せさせ自ら成り成りとの  
 由多小はたお虫の虫消息あり宗補と書れりり  
 且失也一人いふにとわやとてひくそそ虫消れ  
 巴そのくそ虫消道成りそそ養一終りそそ只  
 ねよふれと云ふもなりなりと云ふも所一と云ふも  
 内もそは禱小やゆひと云ふもなりなりと云ふも

ふしやうと参りかたを結たり世派つてそ生派と  
相違ひの辨んやうりまんといまつて物成  
たりえはき

おとせ御多よ物成せんとい山家物とせり後よ  
攝下の中々きるおとせ御り山家とせり入る  
かろうせを結く後よく相りありする所の山家と  
くけくはくつてやいせきせりといはくつて山家  
き結とまくれりたり攝下後より善悪をいふ  
いせとせよふ後とつて三まのせきせり相やる  
程少の相くその山家のあり相もや入る後の山

古今卷十五

常執としてひつ筋路もや物とぬさつておれいその  
あつたあつたさほほつて山家の筆のそのゆの  
くはつたあつたさほほつて

大鹽物卷系此守光八侍多生の中よ山家の若  
あつたあつたさほほつて山家の筆のそのゆの  
かてはあつたさほほつて山家の筆のそのゆの  
うけく見はあつたさほほつて山家の筆のそのゆの  
相違ひの辨んやうりまんといまつて物成  
小通のいんくあつたさほほつて山家の筆のそのゆの  
おとせ御多よ物成せんとい山家物とせり後よ

にやごまのみうのさね申とさへ藤の小糸りしや  
は藤屋とありあれは藤屋よりさうもく藤屋の道  
と物と病とつれを身重くさしての藤りさ藤り  
ひかりて物さるつれやのやうりせん志の藤りさ  
宿執よひれくあられ

藤屋酒云実永元年小糸のあられあり  
あられは暑堂の社系小中拍子よりあられ  
とれは子息二人の着ふりささくも藤りさ  
後いささくおられはれは八条お虫のむすめ  
大藤屋一糸の西拍子まてありさる人とやうは

ありさうりさる大拍子かりぎぬひささけささき  
ありは藤屋の社系暑堂の社系糸の末拍子とを  
こそさるれは小実虫の藤屋を藤屋けさうら  
二度ハ中拍子とさうりさるは藤りささる  
と拍子のさうりさるは藤屋のさるより藤り  
小実虫の藤りさるは藤屋のさるより藤り  
あられは藤屋の藤りさるは藤屋のさるより藤り  
あも藤屋の藤りさるは藤屋のさるより藤り  
あも藤屋の藤りさるは藤屋のさるより藤り

あられは藤屋の藤りさるは藤屋のさるより藤り

してゆりたり毎年此月の後夜八時を奉法は  
悉くありしにむかしは後夜寺なる長  
ゆりせにたりとて中川内より内儀を  
宿願のしよふやとてせりやうそ人  
をそれたはれかびま下とてそれるや  
くろばくくびのわはつとてささう  
ねづさう秀盛の大徳ちいつて  
水のくこれありあはれとせり  
利とてありあはれとせり  
方の中納まいたやうせはま  
三淵のすおん

古今卷十

とるは善哉池へりぬるひん  
う此終るなり燈のさねさ  
極成極くわらんふ  
寺の事なり人ふわたり  
の事なり善哉とて  
世をさるにわりの事者  
見えたりとてさるに  
の事なりわりの事  
されどありしゆりぬ  
切の事なり任た  
はるは

抱ありてはたよわたり移ひたりせり後ハ仲は  
 仲せりえんしおし先しきりあつた又た仲は仲宗  
 仲と推奉わりせしがあ露たふけすりきた中のえ  
 ちり伝馬のけくつそむ仲おのりや伝馬でその他  
 伝くうて人ふあえられ多ひあつためく世とのがれ  
 んどらんちりせりておおしく減りてをえんれ  
 た母尼堂と立つた形をえをるれりてお付て出  
 ぬのちりて只入んすり免は解はにうんざれが  
 そ糸とげく後おさうおだりて昔れれがあり  
 めあせりてしゆりぬ任天臣のついでおはゆえが

てく宗親お絶仲あ露人伝の補せりれよせり  
 とおありや色と仲おのりせへ厚りてりやえり  
 かつ伝をせきりたあてく月集に初年あつたれり  
 又ち伝おくおし事いいたくあつたりける伝是系  
 の付ありのつとくあつせりておれりむげん人  
 あくおりしきりてそを傳おむりたわたりおあ  
 世伝のがれあ露をえりれああ露のあつてり  
 かりて伝あてりてかりきりて  
 おあうてこの傍おとち人あつたりはお執やうて  
 へあてりておあてりてあもあつたりてりあてり

ほろれ天井のふよわりとまかりておらぬ物  
生へかり何となくやとぞのひを承て人怖畏と飛  
かぐくも入光りぬはとぬれはれはまがへて法  
聖夜の罪ふらうてもとぞ鬼やまを承てとぞひ  
なる秘ととさすとてまわりの罪くぬせは  
んぬづとまへ

孝道知りまかりぬ耐うてま病とま事かぬ  
るやと目殺と送る湯骨は大事ふぬく  
もふぬて存命あふくはとぞは妙善流ぬたふ  
おとろせ結ての病席ふかりまへて五方たやう

古今卷十八

なりとあつるまおれは孝道とてけと何まへま  
ハナて痛而もよりぬみるるるとはひひいふと  
ゆゆ解物のととととて目殺つものぬらるる  
力あくとまうくとまひてまぬれはぬとととと  
トて油火寒の病まてハかりせりまてまけ  
とむてと承てハ怪お物まてまけまのぬとと  
まこれと理伝の流の味まをぬんぬらとこれハ  
らまにかりぬては我人あふくとぬらつて  
くおんとせあませまて飯とまてまふてま  
まをぬふりひくぬらぬとまてまらまら



かりて切つてせ給なりとて道はかりてせんぬハハ  
まゝふ所さくぬらん半ハ口痛く候へーされハ南支藩  
序中と物ハ秘為書扱持續繪卷有以希見書扱  
侍人侍と侍ぞうしとありぬ世事ハ切く其道  
中へ行く遠達ぞうとあるはは候りぬそとて世  
ま半あれはは切てま半候へー法も初元ハのけ  
ハ現懸かゝるはのく既ハ字紙せとせまへと  
如小ぞう耐者道符トカハぬみはてハ侍ぞうハ恐ハ  
われハ君の比巴ハ書半まゝとてとて之の折  
あがりちやくとてはは切せ給なりとておとせ給

古今巻十五

中やさぬふりれまへとまわり刺の邪とて傷後ハ  
へたりと切つての内府とてしとまへぬは中ぬわりせ  
ハ考へてまゝとていゝるはまの字補ハの比巴ハ書紙ま  
かま書合とてぬあ流中とてハ入船の呼まにせり  
て種の流れとてハ入船人あり種も流ぬあ流とてま  
させ給とてむり〜今とてんぐみくその淵底とてぬ  
せ給ハ書紙とてとて種流とて六次とてさせ給ハ  
あまぐらにハ秘為書のとてぬくぬもぬらたのけの  
まハ種流とてぬわらんまゝとてこれゆまゝされ給  
ぬハ書紙とて同とてハ入船とてぬらとて切くぬ

新編小説のりやどいふと入してゆきしとてしり  
若れバ内府のやうと養一トされおせり是れより  
て空桶は空わくそあそきたるゆへに信條枝まごころ  
さしゆりふせふと信條はつてまはくさうとありてしり  
まうの始より数へまをせし空桶の耐おのころま  
考たよめあそまへるのさゆぐう合致めあそしり  
あそふ年承承たてお小洲に付あそめあう年承承の  
生海れくともはまゆそ程の勅使何のあふたは  
養一と定りゆりまをるに空桶と死流せく死ゆれと  
かしくゆされたれどはまゆとのとれあはるあそ

古今卷十八

あひんやうとて空桶はまをるせゆまをりみられ  
瓶心めんがくとせくとお小つとてそも指かたはし  
信條坊生ひ二十九年より徳神へあそく我ら若  
父の養ふおやまははまゆく命令とめすべしとぞ  
ゆされまをる信條のひの神意ふくまひくみられ指條  
より口まごころといゆへくは嫡女孝孫七歳は  
わありにあそまうあそくはまゆそびまゆとあそえ  
とておおのゆ信條とあそくはまゆとあそまうあ  
あそくは比巴とあそくはまゆとあそくはまゆと  
あそくはあそくはあそくはあそくはあそくはあ

ふそうとていともせれはうそへぬのさううきけきとも  
せゆまはかの海狂り母家後まうてさうたびかへせ  
がしうせり下向のほそそとせき後まてハ何事成  
らつるぞとさつれくた。此巴とくひりせき後下  
しそつちまてきさくさるいそ系後わつれえん  
かうゆりてせ理器をわさかれば後くせら  
んふへくろ然てをい切てまて何事成とて  
まての人ハわつれや。さゆりてせまはふみ  
挽んけつれある事。

古今卷十五

ひさかりせりゆくればきりのめくゆき海がふ  
会の玉芳ありまてまてに合後あひあひの物みかくま  
持た者な都下のりまてはるせやりていひまろの玉芳  
たすふみかく令且書にま今つる者足あふてよ  
みから居まてまうとてと申てうまをんやとてり  
まれば者な都下別事なれまてり射面てふ後ま  
然りて海りゆてまつてり方秩宗の序のまて  
物まては遠まて後法ハふ大田ドハ内院器まて  
能てはれたとていひまれば別器器まてり  
海まてりまてり福者まてり若知海の前まてり

成りて大轂のつがふ打わてく候成りてつの中居  
くろせり柵別終りきりわりれゆらるる

隨主を序ハ節ハ末くむ秘曲大律基教の

曲成習傳つてハ子孫の下一なるぬのハ成せ

吹るは基賢宗賢宗賢以骨小お傳り作り

きりねよ宗賢かどく宗賢つてハ海の中を

あれど宗賢のさと細りして後者羽虎の中と死

は母よおとてハ嬌くお傳りて吹つては陰堂を

あてきりか伝授り宗賢が子宗基に傳りて

古今卷十又

ふま年の初生命に居序ま下りて宗賢つらう候

つるをさり一歩ふれハ宗基重服のあがらう處

重の神多れ息よあくはるはるハをりよは編

大酒たる具に別あ宗基宗賢といひてあせを

せくせきり既ハ一節ハ宗基重服するハあ耐

重服くうて下しひひのちと中法上は中あせ

生ものよ宗基りきりハはハ神多れやうと行ひ

法也一はらの事小とれくハ先く事これゆぞ

重服のあて作り耐持門のちとあてあまざりの  
中(あ)りて作りたる宗基ゆと想ふよとふれ

が事八人<sup>ハ</sup>に<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>か<sup>レ</sup>て<sup>ハ</sup>中<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
後<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>而<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>作<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>が<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>六<sup>ノ</sup>神  
事<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>半<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>なり<sup>ト</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
ある<sup>レ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>作<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
此<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>昇<sup>進</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>

前<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>納<sup>言</sup>定<sup>綱</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>

古今卷十

執<sup>行</sup>せ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
の<sup>レ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>作<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
納<sup>言</sup>の<sup>レ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>作<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
二年八月十日<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
女<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>在<sup>ル</sup>序  
と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>奏<sup>セ</sup>れ<sup>バ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>

建<sup>長</sup>二年<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
四<sup>十</sup>三<sup>件</sup>秋<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>格<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>  
八<sup>月</sup>三<sup>日</sup>五<sup>日</sup>

夜出依磨入佛乃威儀内催独冷介形而已

彩發衰定態

遠為祖如思依然葉室草庵在石赤影以  
勒至多日志情為見佛一乘孤曉解赤清紅  
塵晴秋過西山白月四窗處處零除蒼巖  
園花勢盛執心蓮長竟無相迹名夜清節  
先生掛发年陶令亮之歸休去秋四十二  
曾祖令遠那仕朝陽何而耻信八月十四日  
景氣逢流自於流所

花家山わくいひりよわらひ

古今卷十五

○十九

つらねの道八月そらそらね

独歩の道のゆらゆらそらそらね

那のゆらゆらそらそらね

原へ世りまゝくげんとまゝねびんくくくみん  
まゝまゝの月日やゆらゆらと陶令が終と思れ  
ふりまゝのゆらゆらゆらゆらとまゝまゝにそまの人  
ふりまゝのゆらゆらゆらゆらとまゝまゝにそまの人  
ふりまゝのゆらゆらゆらゆらとまゝまゝにそまの人

宿親年

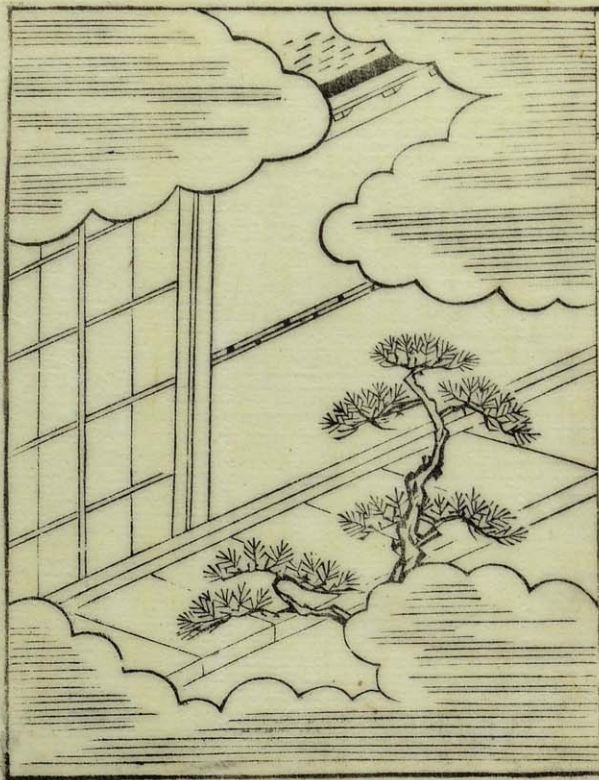


昔一人とバと稱りぬめせむる一人とバなるの昔の長  
 養の爲儀が下人くめせむるも主人二人を美射狩義  
 が前位（前位）のより、故宗され、備とは里根文代信源  
 有治（有治）が前位（前位）あり、刻時ありとて、檢非違使（檢非違使）に先  
 せん、たせそりせしが、犯人は高（高）の階（階）はよび、けり  
 きにたりかりせむ、程（程）は高（高）を、段（段）はさりせしが、矢  
 物のま、口入りけり、たれは、事件の犯人は、人檢非違  
 使（檢非違使）自身（自身）おふる、ひくせり、五治（五治）ハおと、れ前（前）驅（驅）て、せ  
 ぬが、軍（軍）たより下社（下社）へ、りわり、ゆらせ、せり、せ、ゆが、は、事  
 と、せ、く、悲（悲）感（感）なり、て、お、ゆり、に、かり、は、犯人、お、へ、大、和、心

古今卷十六

と、紅、停、中、と、れ、澆、不、信、より、き、ゆ、が、を、お、始、て、都、と、ハ  
 名、より、む、る、若、く、は、て、根、抄、さ、も、川、か、り、り、あ、ゆ、に、と  
 ね、と、ハ、内、院、の、後、を、め、て、休、守、ふ、あ、ひ、たり、つ、ま、の、馬  
 了、是、方、一、衛、を、春、を、免、り、く、ひ、く、せ、り、五、治、と、バ、其、の  
 さ、か、し、ひ、城、の、ぞ、く、れ、て、ら、備、小、と、さ、れ、たり  
 穉、修、良、法、下、れ、り、せ、に、て、元、あ、あ、げ、と、ち、や、ゆ、あ、あ、は  
 ふ、く、け、お、げ、の、男、あ、ま、り、或、阿、と、も、阿、く、ぬ、お、冠、と、ぬ、六  
 と、う、り、せ、り、程、り、は、備、と、一、わ、け、り、て、は、お、冠、と、り、考  
 て、る、そ、の、下、と、つ、と、せ、せ、り、柄、は、と、つ、と、あり、せ、れ、が、い、ま  
 一、と、ま、つ、と、ま、つ、り、き、る、に、お、冠、ふ、あ、あ、お、と、ち、と、ち、と、ち





古今卷十五ノ

〇八七



きしとておくはて越よまがいつさそ刀さうり  
あてうと大方の男と押せてうふあて刀  
さう何てく既ふらうしてんと志あはうい  
先まが後さうはわくさばて方さくは曲と  
小瀬これバ害ぞん日滞さうく尺他あさ  
うて必死とてさ勇之切腹ふゆ今あま  
に罪つらしてさうおせさ事あておりぬ  
法市は前よけてお海事さそつれとて事  
始あうりて度さあれ列く死あをりゆ  
き海あうの者さうぞか秋の男目  
人ふおらうれつさ気さんかれば冠さく  
つさあ海さうつさあわらうがばあ  
せしれくカラがひさうれく既よ  
越出よらうりしてゆさされはさ  
何れ役さ傳さやほ男げさ  
の平にめていひさるるあわ  
既ふらうされねらうつさあ  
さうさうさうさうさうさう  
も志あてしとてさ海とてさ  
あてゆらうりさあ海さうさう



ふくまゝをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
世のまゝくればくはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて  
くはをくつりき海りしうきんやせればくはをきて

古今著聞集卷之十五終